鼎談 長井市の挑戦が示す日本の未来～地方から始まる教育改革

地域のともしびに

少子化が叫ばれて久しい。第2次ベビーブームのさなかの1973（昭和48）年に約209万人だった全国の出生数は、半世紀を経た2024年、70万人を割り込むまでに激減した。本県は04年に1万人を下回り、24年は4699人に落ち込んだ。教育現場が激しい少子化の波にさらされる中、長井市は「長井の心（平和を愛し共存を尊ぶ心）」を基盤に子ども一人一の個性と多様性を尊重し、夢を育む教育を掲げている。「長井市の挑戦が示す日本の未来～地方から始まる教育改革」をテーマに、内谷重治市長、寺脇研元文部科学省大臣官房審議官、嘉山孝正東北大参与が鼎談した。

東北大参与　嘉山 孝正氏

かやま・たかまさ　1950年神奈川県生まれ。東北大医学部卒。山形大教授、同大医学部付属病院長、同大医学部長、国立がん研究センター理事長を歴任。18年に全国医学部長病院長会議「大学医学部入学試験制度規範」作成委員長。現在は東北大参与、戸塚共立いずみ野病院名誉院長、脳神経外科研究所長、西島病院理事長顧問、三友堂病院医師など。98年山新3P賞（平和賞）、20年三浦記念賞を受賞。

元文部科学省 大臣官房審議官　寺脇 研氏

てらわき・けん　1952年福岡県生まれ。東京大法学部卒。75年文部省（現文部科学省）入省。2001年文科省大臣官房審議官、02年文化庁文化部長などを歴任し、06年退官。現在は京都芸術大客員教授、映画評論家。東北芸術工科大理事も務める。著書に「それでも、ゆとり教育は間違っていない」「これからの日本、これからの教育」（前川喜平氏との共著）など多数。

長井市長　内谷 重治氏

うちや・しげはる　1956年長井市生まれ。長井高、立教大経済学部卒。79年長井市役所に入庁し90年に退職。都内でコンサルティング会社、出版社に勤務し、99年の長井市議選で初当選。市議を2期（7年5カ月）務め、2006年の市長選で新人4人による選挙戦を制し、初当選した。現在5期目。西置賜行政組合管理者、山形鉄道株式会社取締役会長、県市長会副会長。

小学校統廃合当面せず ■ 偏差値で評価 社会にまん延 ■ 地方の人材確保 学校が鍵

―初めに、長井市の教育の現状を伺いたい。

内谷　少子高齢化によって地方自治体の大半は人口減少に悩まされている。子どもの数が減り、各地で小学校の統廃合が進んでいるが、地域にとって学校がなくなることは、果たして良いことなのだろうか。3世代同居率の高い山形県でも核家族化が進んでいる。交通の便が良く、都市機能の整った地域に若者が移住する傾向は強い。2万5千人を切るわれわれのような小規模自治体にとって、地域から学校がなくなることは若い世代のさらなる流出につながりかねない。こどもまんなか社会の実現に向け、長井市は当面、小学校を統廃合しない方針だ。

子どもの数が減ることで複式学級に対する市民の不安を耳にする。学力が落ちるのではないか「限られた人間関係の中で社会性が育まれるのか」という声だ。長井市ではオランダ在住の教育社会研究家リヒテルス直子さんを招き、子どもの主体性と多様性を重視した欧州発祥の「イエナプラン教育」の実践に取り組んだことがある。当時は時期尚早の面があったが、子どもの生きる力を育む重要性が増している。

―寺脇さんは文部科学省で教育改革の推進に携わってきた。

寺脇　偏差値で評価し、学校に序列をつけるという社会にまん延する価値観が子どもを縛っている。こんにちの教育の根本的な問題だ。画一的な詰め込み教育は高度経済成長を成し遂げる上で必要なプロセスだったと思うが、成熟社会には合わない。かつて、荒れた中学校が話題になった。ガラスが割られ、先生が殴られることもあった。教育内容が増え続け、子どもたちが悲鳴を上げたとも言えるだろう。

成熟社会の教育については当時（1984年）の中曽根康弘首相が主導した臨時教育審議会で議論され、ゆとり教育の基礎が作られた。ゆとり教育は一律に教える内容を減らしたと受け止められ「学力が下がる」と批判されたが、本来の趣旨は理解の進んだ子はより力を伸ばすようにし、そうでない子は基礎をしっかり学べるようにすることだ。

少子化で地方が衰退し、学校がなくなり、若者がいなくなる悪循環が起きている。明治期は全国に学校を造ろうとしたが、今は子どもがいないからなぞそうという。それでいいのか。高校がない人口10万人以下の自治体は多い。若者がいない状況では地域の活力が失われるのは明白で、コミュニティーが守れなくなる。

―嘉山さんは国立がん研究センター総長、山形大医学部長として多くの人材を育ててきた。

嘉山　そもそも教育を生物学的に考察すると、動物は親の動きを見て、行動、思考のやり方を学習、成長していくように、教育とは基本的に子どもが大人の行動を見て学ぶことだ。近代社会では親と子がともに、規範が失われ、メリトクラシー（能力主義）につながった。医学部でも一部の学生が医者ではなく、コスパの良い職業に流れる実情があり、人材育成は重要だ。

医療現場では医者や看護師など、多職種が協力する「協働」の考え方を伝えている。協力して働くことが「協働」の意味で、職業上の尊敬が必要である。このような哲学でできた環境下で学べば地方でも世界に通用する人材を育成できる。地方の人材確保は学校が鍵を握る。子どもは必要なことを自然に学べ能力を持っており、適切な教育環境を提供すべきである。

離れて生活していく。従って近代社会では学校教育が必須となり、学校その現場感のある教育を提供することが最重要となった。長井市の人口規模でも、そういった内容を含んだ教育場を与えなければ子どもは健全に育たない。

子どもの人口が減少している近年、学校の統廃合が議論の中心となるよりは少人数の学生を十車に教育することの方が重要ではないかと思う。コスパ（コストパフォーマンス）やタイパ（タイムパフォーマンス）ではお金を得ることができても幸せは得られない。

不登校の子どもが生まれる原因は子どもが自分の存在を認められないことと考える。大人が愛情を持って子どもたちに向き合うことが欠かせない。1970年代以降の米国ではキリスト教教育の衰退と

職業体験を通じて子どもたちが社会の仕組みを学んだ「キッズシティランド」
＝11月、長井市・旧長井小第一校舎

語り合った人たち（順不同）

- ■長井市長　内谷重治氏
- ■元文部科学省大臣官房審議官　寺脇　研氏
- ■東北大参与　嘉山孝正氏

▽司会＝山形新聞社編集局長 松田直樹

長井市の教育と地方から始まる人材育成について語り合った鼎談
＝同市・タスパークホテル長井